

ビデオ会議システムを利用した遠隔授業の試み

原田明子

(原稿受理日 2004年3月31日)

1. はじめに

情報通信の発達により、日本語を学習する環境や手段、方法は多様化しつつある。その中でも海外において今後新たな展開が期待されるものとして、オンデマンド型の授業やパソコンを利用した遠隔教育が挙げられるだろう。欧米に発祥し郵便を主体として行われていた遠隔教育は、1970年代ごろからその勢いを増し、1980年代になるとアメリカを中心にマイクロ波や衛星通信が取り入れられ、マルチメディア性を帯びるようになった。1990年代になり、インターネットがこれに加わることによって文字と音声と画像を一体に扱い、対面式の授業が行われるようになってきた (p.77 松岡 2001)。本稿で報告するビデオ会議システム (BitsMate) とは、主にデスクトップ型パソコンを介した双方向の通信映像システムで、デスクトップ用の小型カメラによって映し出されるお互いの映像を見ながら、ヘッドセットのマイクを通して音声によるリアルタイムのインターアクションを可能にしたもの (p.91 宮崎 2001) である。このリアルタイム双方向型教育交流システムでは、単に相手の顔を見ながら話をするという映像と音声のチャンネルだけではなく、画面上のホワイトボードという電子ボードソフトの機能を利用して、図、絵や文字などをお互いに入力し、それらを使ってコミュニケーションするという文字チャンネルによる情報交換も可能となっている。また、インターネット上のあるサイトを相手に紹介して、その画面を一緒に見ながら話をしたり、自分の書いた作文やメールなどを相手に提示し、それらを見ながら細かく添削してもらうといったタスクも可能である。人的リソースに限界のある海外の日本語教育において、学習者が日本のネイティブスピーカーとさまざまなチャンネルを使って自由にコミュニケーションできるこのような日本語学習環境を提供していくことは、学習者の日本語学習への動機付けやその維持に有効であり、自律的な学習能力の発達を促進する (宮副 1998) と考えられている。ただ、こうした授業を行うためのハード面での環境が、タイをはじめとする東南アジア諸国ではまだ十分に整備されていないために、その利用状況はまだ特定の場所に限られているものの、近い将来には教育環境の一つとして定着していくことは確実視される。今回、Waseda Education (Thailand) (以下 WET) では、実験的な試みとして早稲田大学大学院日本語教育研究科とを結んで、この BitsMate システムを用いた遠隔授業を行った⁽¹⁾。本稿ではその結果を報告し、今後の日本語教育への応用について言及していきたい。

2. 遠隔授業の概要

WET では、開校当初よりパソコンを日本語の授業に組み込むべく、さまざまな取り組みを行ってきた⁽²⁾。その一環として、昨年後期よりこの遠隔授業を本格的にスタートさせた。授業は基本的に月

に2回、金曜日の午後3時～4時（日本時間午後5時～6時）とし、タイ人学生3～6名が早稲田大学側の院生3名とBitsMateというビデオ会議システムを使って行った。これは正規の日本語コース外のアクティビティとして位置づけられていたため、評価の対象とはしていない。

2.1 参加者

タイ側はWETの渡日前留学準備コース⁽³⁾に在籍するタイ人の学生15名。同時に3台のパソコンを使用し、それぞれ1対1で会話をを行った。日本語レベルは初級終了程度から中級前半程度。早稲田大学側は大学院日本語教育研究科の第二言語習得研究室の院生に依頼した。この中には日本語ネイティブだけではなく台湾からの留学生も含まれていたが、その日本語力は非常に高いものであった⁽⁴⁾。

2.2 トピックおよび活動形態

活動は2003年10月から2004年2月までの5ヶ月にわたり9回行われた。毎回事前にトピックを決めておき、それに基づいて会話をを行うという設定とした。トピックは、学生との話し合いや教師の発案によりWET側で決定したものを早稲田大学側に知らせ、双方がトピックの内容を準備をして授業に臨むようにした。トピックの一覧は下記の通りである。

表1 遠隔教育授業のトピック

	年月日	トピック
第1回	2003年10月17日	自己紹介
第2回	10月31日	自己紹介、タイの文化、APEC会議
第3回	11月12日	タイのお祭り
第4回	11月28日	自己紹介、タイの観光地の話
第5回	12月19日	タイと日本のお正月
第6回	2004年1月16日	学生の書いたスピーチの添削
第7回	1月23日	日本語の習得方法
第8回	2月6日	WETのホームページ紹介文の添削
第9回	2月20日	渡日前留学準備、日本語学習法

また、授業終了後に院生と学習者双方に話し合いの内容、困った点、反省点、相手に望むことなどを記した報告書を提出することを義務付けた。以下は、その報告書及び学習者へのインタビューをもとに分析したものである。

3. 結果と分析

3.1 日本人大学院生の反応

早稲田側の院生のフィードバックは大きく3つに分けられる。まず、P C機器や回線、BitsMateに関する問題、さらに遠隔システムを使用することによって起こる問題、そして最後にタスク準備や時間配分などに関する問題である。

1) P C機器や回線、BitsMateシステムに関すること

- ・ P C機器が急にフリーズした
- ・ タイ側のP Cがウィルス感染していることが分かり、開始が30分遅れた
- ・ 途中音声が消えることがたびたびあって聞きにくい（延べ8名）
- ・ 画面が暗くて人の様子が見えない
- ・ ホームページ(HP)が文字化けして読めない
- ・ HPを見せたとき、相手のモニターに表示されるまでに時間がかかる
- ・ BitsMate上でパワーポイントが動かない
- ・ P C 1 台の音声状態がよくなかった

などのトラブルが起きた。これらの原因の多くは、W E T 側の通信情報環境によるもの及びBitsMateが有する機能の知識の欠如によるものであった。パソコンの容量自体が、早稲田側の100,000Kbit⁽⁵⁾に対して、W E T 側はわずか128Kbitという限られたものであったため、同時にBitsMateを使うと処理に時間がかかったり、操作がうまくできないことがあった。また、パソコンを専門に管理する者がいないために、急なアクシデントへの対応が難しかったことも一因として挙げられる。決まった時間内に行わなければならない遠隔授業においては、機器のトラブルは最小限にとどめる準備と努力が必要であろう。また、日本人の院生、タイ人学生、及びW E T 側の日本人教師全員が、システムの機能を十分に使用できるだけの知識を持ち合わせていなかったため、トラブルが起きたときに迅速な処理ができず、操作に手間取ってしまった。事前に日本人の院生もタイ側の日本語教師も機器の使い方について説明を受けていたが、実際の場面では戸惑うことも多く課題が残った。今後は事前研修をしっかりと行い、余裕を持ったシラバスを作成していきたい。また、早稲田側にW E T の通信事情について明確な説明をしておくこと、遠隔システムの操作・機能に関するマニュアル及び問題発生時における対処マニュアルの作成も重要だろう。

2) 遠隔システムに内在する問題点

- ・オーバーラップがあって話しにくかった
- ・音声、映像に若干のタイムラグがあるために発話が重なってしまい、調整するのが難しかった
- ・ときどき学生の声が途切れたので、非常に聞きづらかった
- ・時間のずれにうまく対応できなかった
- ・タイムラグのためにこちらが聞き取れなかった部分を聞き返しにくいと感じた
- ・相手の映像が見えることがすごく新鮮で興奮した
- ・相手がきょろきょろしていると、機械の不都合か言葉が理解できないのか、誰かに相談しているのかわからず対応が難しい

といったコメントが得られた。対面式の接触場面と異なり、遠隔による接触場面では音声のタイムラグによるあいづち、ターンテイキング、オーバーラップなどに関するインターアクション問題が数多く発生し、調整行動が頻繁に行われている（伊智鉉 2003）ことが明らかにされている。今回の遠隔授業でも、特にオーバーラップに関してはかなり問題視している者が多かった。単に発話が重なることによってその言葉が聞き取れないというだけではなく、オーバーラップの積み重ねが会話の流れに支障をきたす、何回も聞き返すことにより学習者が日本語力に自信をなくす、学生の言い淀みの回数が多くなる、学習者は相手の話にあいづちを入れるだけになるという連鎖状況を生みだすこともわかった。これらの問題に対して大学院生側からは、双方が音声的なずれのタイミングに慣れていけばそれほど問題にはならない、オーバーラップのために聞こえなかったと明示すればよい、このデメリットを上回るメリットが遠隔授業にはあるなどの肯定的意見も多く述べられた。また、映像は Web カメラを通してしか見えないために、相手の言動が不自然だったり落ち着きがなかったりすると、その理由が分からず対応に苦慮することもあった。今後はこうした遠隔による接触場面でのどのようなインターアクション問題が存在するのか、参加者はそれをどう捉えているのか、それらの問題をどのように克服していくかなどに関する基礎研究を少しずつ積み上げていく必要があるだろう。なぜなら、通信情報環境の整備に伴い、今後マルチメディアを利用した言語教育や言語習得支援が更なる広がりを見せていくことは確実だからである。

3) タスク準備や時間配分に関すること

タスクや事前準備、時間配分についても多くのコメントが得られた。院生側の反省点としては、

- ・何をすべきかよくわからなかった
- ・世間話をしていたはいけないのではないかと1人で空回りしてしまった
- ・相手の興味、知りたい情報（日本の生活費など）を事前に知っていれば、前もって情報収集し、もっと正確な対応ができた

- ・こちらからタスクについて切り出さなかったのも、その話が十分にできなかった
などが寄せられた。

また、学習者側への要望としては、

- ・雑談が多いので、もっと計画を立てて時間を有効に使いたい
- ・始まる前にお互いその日の予定を確認し合えたら、流れも分かり時間も有効に使え。また、準備したものは遠慮しないで見せてほしい
- ・もっといろいろな機能を工夫して使ってほしい、特に写真などの画像で現地の様子を紹介できれば、もっと突っ込んだ話ができる
- ・自分が質問したいトピックの関連語句をもう少し準備してきてほしい

などであった。今回の実験では1人30分を原則として行ったが、タスクに入る前のウォーミングアップ、雑談の部分が多くなりすぎたという反省点が残る。院生側もタスクについての話を学習者側が切り出さないことを不自然に思いながらもそのまま会話を続けた者が多く、後半時間がなくなって中途半端に終わったケースが少なくなかった。これは上記のコメントからももうかがえる。単なるお喋りでも学習者にとっては学習の一環になるが、毎回タスクを設定し回を重ねるごとにそれがどう複雑化していくのかその変化を追っていくことで、これからの遠隔場面での言語学習支援の方向性、可能性を探っていくことも必要である。また、タスクの決定にあたってはニーズ調査を行い、できるだけ参加者間で活発なインターアクションが起きるようなものを設定するよう心がけること、タスクの準備期間を十分取るようにすること、相手にわかりやすく提示できるような方法を事前に考えておくことが重要である。

以上、遠隔授業に関する問題点を中心に考察を行ってきたが、活動を通して得られた感想・気づきに関するコメントも紹介したい。

- ・タイ語で挨拶したら相手がすごく喜んでくれた。また、発音がきれいだとほめたら、うれしそうだった。自信を持たせることができたと思う。
- ・楽しい。タイ人には当たり前のことでも私には非常に新鮮。これからもタイのことをいろいろ紹介してほしい。個人的な趣味の話からも初めて知ることが多く、それらはステレオタイプのタイのイメージと違い、大変興味深い。
- ・タイの学生がいろんなリソースを使って勉強していることがわかった。また、その話が私にとって興味深いことが相手に伝わるといいと思う。
- ・学生はまだ日本語力は十分ではないが話しかけたらいい反応が返ってくるので、自分はもっと話したい気分になった。それで時間があっという間に過ぎた。
- ・学生が積極的にいろいろな語彙を使おうとしているのが印象的だった。
- ・遠隔という方法が、どんな地域のどんな学習者が、どんな相手とどんなことをするのに適しているのか、これから考えてみたい。

・結局、言葉の問題というより人と人とのコミュニケーションの仕方が問題になっていると思う。相手に積極的に話しかけたり、自分がこの活動を楽しんでいることをアピールすることにより、学生にもこの遠隔に参加する意欲を高められたのではないと思う。

言語の学習にとってモチベーションの持続は不可欠な要素である。日本人ネイティブと接する機会の少ない海外の日本語学習者にとって、直接ネイティブスピーカーと話をしたりほめられたりすることは、学習の動機付け及び学習意欲の維持に効果があると思われる。また、コミュニケーションは人と人とのやり取りであり、話したいと感じること、話したい事柄があること、話す必要性があることが基本となる。こうした学習者の表現意図とそれを受け止めてくれる相手や場の存在が持続することは、他者とのインターアクション活動能力獲得にとって望ましい（春原1992）。その際、特定の人と継続して会話を行えるような配慮も必要であるかもしれない。

今回の実験的な遠隔授業を終えて、早稲田の大学院生全員がこの活動を肯定的に捉えており楽しかった、または是非参加してみたいとの回答を寄せた。相手の顔を見ながら、リアルタイムで海外の日本語学習者とネットミーティングすることは興味深い活動だったに違いない。また、上記のコメントから、日本人の大学院生1人1人が個としてタイ人の学生と向き合い、日本語という手段を使ってコミュニケーションすることによりいろいろな気づきが生じていった過程がわかる。このようなリアリティある学習が確保され継続されていけば、双方の異文化理解にも役立つであろう。

3.2. 日本語学習者の反応

次に、日本語学習者によるフィードバックについて見てみたい。学習者のデータは、主にインタビューと報告書（英語/タイ語/日本語⁽⁶⁾）によるが、遠隔授業中における教師とのやり取り、学習者の意欲・態度なども分析の対象とした。

学習者のほぼ全員が当初、この遠隔授業の実施に消極的であった。それは30分間という決められた時間内は、何が起こっても日本語を使って相手とコミュニケーションしなければならない、その場から逃れることができないという緊張感からであったように思う。しかし、ローテーションを組んで実際に始めてみると、自分の順番以外のときにもパソコン室に足を運び、熱心に他の学習者のやり取りを観察したり手伝ったりしていた。パソコンの操作に慣れていない者はBitsMateのいろいろな機能を使用した活動を行うことは難しかったが、それでも活動の後半になってくると、学生同士助け合うことで何とかこなしているようであった。特に遠隔活動を通じて、タイ人学習者間でのインターアクションが活発に行われたのは収穫の1つだと言える。また、回を重ねるごとに相手との距離も縮まりタスクの種類も複雑化していったが、その分機器のトラブルが増え、実質的な対話時間が少なくなってしまったのは残念であった。

3.3 遠隔授業の問題点とその改善策

この活動を体験し、学習者が問題としていたのは以下の通りである。

- ・音声聞こえない、音声が遅れるなどの技術的な問題があった
- ・BitsMateの操作方法について事前にもっと詳しく知っておいたほうがいい、そうすれば、時間が有効に使える
- ・使用した表現、語彙、文法の間違いで、相手がわからなかったり誤解を生じさせたりすることがあるので、教師が手助けする必要があると感じた
- ・私たちが会話のイニシャティブを持つのはちょっと大変。よく知らない相手と会話をどうやって続けたいか戸惑うし、トピックを提供したくても語彙が不足していて難しい
- ・私たちは日本人と自由に話すレベルにはまだ達していないから、ある程度事前準備が必要、そのためにも3日前にはこの授業の実施とタスクを教えてほしい
- ・ネット上で話すときは相手のあいづちが見えないし、ポーズがあったとき、相手が何か言いたいのか待っているのか判断がつかない。このような遠隔システムを使った場合は、双方向ではなく、一方向で話したほうがいいのか
- ・間違いをその都度訂正してほしい

音声の時間的なずれに関する問題は、克服すべき課題である。日本からの距離が遠ければ遠いほど、このずれは大きくなる。タイの場合、日本と台湾、韓国とを結んで行った遠隔授業に比べて、確かに時間的ずれによる話しにくさは大きいと感じた。今後の技術的な面での改良に期待したいが、日本人大学院生のコメントにもあるようにある程度は慣れによって気にならなくなると思われる。事実、学習者の中には1回目はこのずれにいらいらしたが、2回目からはこういうものだと思い気にならなくなったと述べている者もいる。ただ、遠隔システムに内在する問題のために双方向型のこのシステムを一方向型としての使用に限定してしまうのは、少々もったいない気がする。双方向でのインターアクションが可能だからこそ、より実際場面に近いリソースとしての意義があると考えられるからである。

あいづち、ポーズ、訂正法、教師の介入などの問題点に関しては、今回得られたフィードバックだけでは量が少なかったので、今後より多くの参加者からのフィードバックを収集し、分析を加えていきたいと考えている。

3.4 遠隔授業の良かった点

次に、この活動を通してどんなことが役に立ったか、良かったと感じたかについて記す。

- ・日本人と1対1で継続的に話すチャンスがある
- ・相手が話している言葉は、今現在日本で使われている生の言葉である

- ・実際の状況に応用できる、お互いの印象や文化・情報の交換ができることが良い
- ・特に発音、聞き取り、日本語で考える練習に役に立つと思った
- ・実際に日本人と話す機会を通じて、どうやって自分の言いたいことを相手に伝えるかや自分の弱いところはどこかを知ることができる
- ・準備をしないで会話をする練習ができた

日本人の大学院生同様、学習者全員がこの活動を良いと思う、楽しい、今後も続けたいと評価した。寄せられたコメントの中で最も多かったのは、実際場面での日本語使用の機会の確保であった。海外においては、日本人と話したり日本語に触れたりする機会を持つことが難しく、そうした機会をより多く提供することは教師の大きな仕事の1つであると考えられる。WETではビジターセッション、ゲストスピーカーセッション、生け花や博物館見学などの日本語を使った課外活動を多く取り入れてきたが、それらの活動は交渉や準備に時間がかかるので、定期的な実際場面での日本人とのコミュニケーション活動の確保はそれ自体意義があると思われる。また、1対1である程度長い時間対話できることもメリットのひとつであろう。ビジターセッションなどではどうしても1対多となることが多く、なかなか1人の学習者がじっくり話せる時間は短い。また、質問を事前に準備してから望むことが多く、日本語で会話を続ける練習としては限界がある。自然な会話の流れを身に付ける、日本語のナチュラルスピードに慣れる、今現在の日本語及び日本の状況がわかるといった面でも、今後遠隔授業の果たす役割は大きいと思われる。

4. 日本語教育への応用

日本語学習者のおよそ80%は、海外における学習者であると言われている。これらの学習者の中には、本格的な通訳・翻訳を目指すものから日本文化にちょっと興味があるから、格好いいからといった手軽な理由で学習している者まで含まれている。したがって、これからの日本語教育を考える上では、言語そのものだけではなく、もっと幅の広い総合的な日本語のインターアクション能力の習得を視野に入れていく必要がある（ネウストブニー2000）。そのためには、日本語や日本人に接する機会の限られている海外の学習者に対してどのような言語学習支援が考えられるだろうか。ここでは、教育・研究・研修を目的としたいくつかのビデオ会議システムの応用事例について考えてみたい。

4.1 言語教育、言語習得を目的とした事例

1) 留学前準備教育

第7回目の遠隔授業（2004年1月23日）において、4月より早稲田大学へ留学する学習者が出発前の準備教育として、BitsMateを利用してタイ人留学生（早稲田大学大学院日本語教育研究科所属）から情報提供を受けた。トピックは日本での生活全般（住居探し、生活費、講義、料理作りなど）。

渡日後遭遇すると考えられる数々の問題について事前に情報を収集し準備をしておくことは、その後の留学生生活をスムーズに行う上で重要な課題である。今回は個人的な形で行われたが、今後は大学関係者とのフォーマルなオリエンテーションといった形での利用も可能であろう。

2) インターアクション能力向上のための教育

学習者のニーズ、学習環境、学習項目の変化に対応し、空間的・距離的な制約に縛られずに、日本語母語話者を含むさまざまな日本語話者と、バリエーションに富んだインターアクションを行う機会を提供することができる。また、活動自体や相手側からのフィードバックを通して、自分の言語使用や学習法に対する意識化や気づきが起こってくれば、自律学習支援への教育としても役立つ。また、チュートリアル講義、遠隔講義といった形での利用も考えられる。

3) オンデマンドを利用した授業

学習者の日本語教育環境の多様化に伴い、ビデオ会議システムだけではなく、オンデマンド授業をはじめパソコンを利用したいろいろな形の授業が考えられるようになってきた。これらの授業を補佐する形での利用も、今後大いに期待される。WE Tでは、2004年4月より本格的に早稲田大学留学生別科の授業とリンクした「オンデマンド授業+BBS（電子掲示板）型」授業⁽⁷⁾を開始するが、この授業において、TAやサポーター役の日本人との顔合わせやオリエンテーションにBitsMateの利用を考えている。海外の学習者とリンクした形で授業を行う場合、どんな人がその授業に関わっているのか、自分がインターアクションしているのはどんな日本人あるいは留学生なのかを知ることは、授業を成功させる上でも重要な要素である。

4.2 研究を目的とした事例

1) 遠隔共同ゼミ、多地点会議システムを利用した遠隔シンポジウム

通常1対1でおこなっているBitsMateであるが、スクリーンを用いることによって遠隔共同ゼミ、多地点会議用サーバを用いることによって多地点での同時シンポジウムなどを開催することができる。このようなネットワーク型の研究システムは、日本と海外におけるインターアクションを促進し、研究を深めていくのに役立つと思われる。

2) 海外からの情報発信

日本語教育は常に日本から発信されるべきものではないだろう（宮崎2002）。海外に固有の問題も数多く散見される。したがって、海外と日本あるいは海外と海外を結んだセミナーや研究会、ワークショップの開催は、各国の日本語教育事情の情報交換にも、また、研究の促進にも役立つと思われる。

3) 研究データ収集

日本在住の研究者による海外調査研究の多くは、現地の教師を介したアンケート調査や短期間に行われるインタビューであることが多く、縦断的な調査は行いにくい。しかし、音声・映像を含むビデオ会議システムを用いることにより、海外におけるフィールドの参与観察や海外在住者へのインタビューも可能になる。日本へ留学後、帰国した学習者の追跡調査などにも利用できるであろう。

4.3 研修を目的とした事例

1) 海外、特に地方都市に在住する非日本語母語話者日本語教師へのサポート

海外で働いている非日本語話者日本語教師、その中でも特に地方や田舎で日本語教育に従事している者は、日本語や日本人に接する機会に恵まれず、日本語力の維持や向上が極めて困難である。タイにおいても、バンコクを除くと日本人在住者は少なく、地方の大学、ラチャバット、高校などで教えているタイ人日本語教師の中には、長時間かけてバンコクまで日本語を学びに来ている者も少なくない。BitsMate などを利用したビデオ会議システムの普及が進めば、こうした現職日本語教師へのトレーニング、サポートシステムの選択肢も現在より増えてくると思われる。

5. まとめ

海外の日本語教育におけるビデオ会議システムの活用に当たっては、まず、通信情報環境の整備が急がれる。また、こうしたシステムの機能を双方が十分に熟知し操作できることも大切である。音声と映像によるコミュニケーションだけであれば、現在チャットなどに広く利用されているMSNメッセンジャーなどを用いて簡単にできるようになってきているが、今回早稲田大学との間で使用したBitsMateでは、電子ボードソフトを使った文字情報チャンネルの使用が可能、Side View機能（教材を交流相手と共有）、Web View機能（HTMLファイルを資料として提示可能）、資料への書き込み機能などを有し、さらに多人数による会話も可能となっている。

しかし、ビデオ会議システムは従来ビジネス場面での利用を前提として開発されたものであり、これを教育上の目的で使用する場合にはその使用に関してまだ問題点も残されている。言語の習得のために用いる場合、対面式のコミュニケーションでは起こらない音声の時間的なずれ、それによる発話の重なり、ターンテイキングやあいづち、聞き返しの不自然さなどが問題となる。今回の調査では、大学院生とタイ人学習者双方の報告書及びインタビューをもとにその結果を分析し、考察を行ったが、今後は会話を録音しマクロレベルでの分析も行いたい。

パソコンを利用したビデオ会議システムは、まだ十分に開発が進んでいない新しい教育リソースであるが、距離的な制約を受けずに、海外の日本語学習者が日本人と気軽にインターアクションできる画期的な学習手段であるといえよう。多様な学習者に対する、多様な学習手段や学習環境の一つとし

て今後さらなる進歩が期待される分野である。そのためにも、パイロットスタディを積み重ね、参加者のフィードバックをもとに問題点を改善しつつ、どのようなタスクや方法が効果的かを考えていく必要があると思われる。

- (1) このBitsMateを使用した遠隔日本語授業については、早稲田大学メディアネットワークセンター、パナソニック・エンジニアリングの方々、大学院日本語教育研究科宮崎里司教授、及びコーディネータをつとめた宮崎研究室の早川直子氏、ならびに5、6期生の院生の方々に多大なるご協力をいただきました。そのご厚意に深く感謝いたします。
- (2) Eメールの書き方、メール友達を探そう、パソコンによる漢字ゲーム、HP作り、夏季タイ研修日本人大学生（早稲田大学他6大学）との事前メール交流活動など。
- (3) 日本の大学への留学を前提としたクラス。1日4時間、月曜日から金曜日まで週5日間の集中日本語コース
- (4) 第1回目の授業のときに、自分の相手が日本人ネイティブではないとわかって日本人と話したいと申し出た学生がいたが、話しているうちに相手の日本語力の高さに驚き、納得した。以後は、どうやって日本語を習得したかを聞くなど学生にとって良き相談相手となっていたようであった。
- (5) 早稲田大学から学外は10Gbit/second = 10,000,000Kbit/second、Bitmateサーバまでの学内は100Mbit/second = 100,000Kbit/secondとなっている。
- (6) 報告書提出の目的を明確に指示しなかったため、当初は日本語で書いてきた学生が多かった。しかし、日本語で正確に感想を書けるレベルではなかったため、2回目以降はタイ語または英語による記述とした。
タイ語に関しては、WE Tスタッフに翻訳を依頼した。
- (7) 講義パッケージの部分を教師のHP上或いは共有サーバに蓄積しておき、学生は各自の大学や自宅からインターネットを介してアクセスし、好きなときに受講するシステム。個人学習となるため、協調性と双方向性を確保する必要があり、BBS機能をTAや学生同士のインターアクションの場として活用する。今まで早稲田大学留学生別科にて行っていたこの「総合」授業を、今回初めて海外（タイ）と結んで実験的に行う。

参考文献：

春原憲一郎 (1992) 「ネットワーキング、ストラテジー — 交流の戦略に関する基礎研究 —」

『日本語学』11号 17-26

ネウストブニー (2000) 『今日と明日の日本語教育』アルク

松岡一郎 (2001) 『デジタル・キャンパス—IT革命で変わる新しい大学のビジネスモデル—』

東洋経済新報社

宮崎里司 (2001) 「パソコンテレビ会議システムを利用した日本語教育の試み」『留学生教育大5号』

91-107

宮崎里司 (2002) 「接触場面の多様化と日本語教育：テレビ会議システムを利用したインターアクション

能力開発プログラム」『講座日本語教育』第38分冊 16-27

宮副ウォン裕子 (1998) 「自律的日本語学習支援のためのネットワーキング・ストラテジー」

『日本学刊』第2号 香港日本語教育研究会 45-53

尹智鉉 (2003) 「ビデオ会議システムを介したコミュニケーションの特徴—ストラテジー使用による

日本語学習者の言語管理—」『早稲田大学日本語教育研究』第2号 245-260